

## 平泉文字資料の筆跡

岩手大学 平田光彦

### 1 はじめに

文字は視覚を通して認識される言葉であり、意味内容と視覚造型を有する。また、手書き文字の造型は、書者の造型意識と書字運動の同期作用により実現される。本小論では、平泉出土の仮名文字資料に関する書的な評価について考察を行うが、必然的に、造型、書字運動から対象を見つめることとなる。

### 2 書の評価について

古くは人品と書、或は理と情の関わりなどが中国における書論の大きなテーマであったが、本邦では近代以降この視座を残す一方で、書の構造を造型と線で捉え直す視点が強調され書の評価における客観性となっている。これは先に述べた造型と書字運動（線）であり、所謂書の「上手下手」や「善し悪し」「美醜」といった価値の程度を評価する言葉は、この2つの視点からの総合評価である。造型では①単体の姿、②文字間の関係、③散らし（空間）、④連綿の組み立て、⑤典型と創意などが、書字運動では①用筆、②運筆・運腕などが、具体的な観点となる。

これらに「力強い」「流麗な」「繊細な」「歯切れ良い」などの多元的な評価が輻輳することで、評価は書の個性に関するものへと発展する。広義の書風と言われるものは、価値の段階評価も含みながら、主にこの個性に関する評価である。

### 3 評価尺度の定立と同時代の仮名書について

日本語韻文を書いた資料の研究は、7～9世紀を中心として充実し、近年では「歌木簡」の概念が提唱される（栄原,2011）など多くの成果がある。これに比べると、12世紀の地方における仮名文字を対象とした研究資料は少ない。平泉出土仮名文字資料の検討に際して困難な点の一つである。手許に同時代における地方出土の仮名文字資料がないことから、本稿では検討の尺度として西行の書を措定した。

西行の書を尺度とするのは、同時代の仮名文字資料としての意味が第一であるが、加えて、周知のように西行が二度奥州平泉を訪れ、当地での感懐を歌に残していることもあげられる。1143年26歳の初度の旅（他に28歳、30歳説がある）から40年の歳月を隔てた二度目の奥州再訪（1186年）の途上では、源頼朝に謁見する姿が『吾妻鏡』八月の条にみえる。この時、頼朝が弓馬の秘法について問うたとされるように、彼の歌が何らかの形で奥州の人々の目に触れた、或は請われ披露された可能性は排除できない。

ところで、西行の真蹟とされる筆跡は数点が確認されるのみである。一般に「西行の仮名」や「西行風」と呼ばれるのは、伝承筆者を西行とする古筆群の書風の総体であり、幅を持った概念である。近年では、その中心に御子左家制作の私家集類（冊子本、歌集切れ）を据えた把握が主であると言える。御子左家は勅撰集の撰集のため、多くの私家集類を書き写し、資料として具備していた。それら手控本の一つ『曾丹集』の巻末に、西行出家前の佐藤義清を指すと思われる「のりきよがふで」という書付が貼られていることから、俊成・定家親子の周辺で歌の書写を協力していた者との関係、あるいは書写に西行自

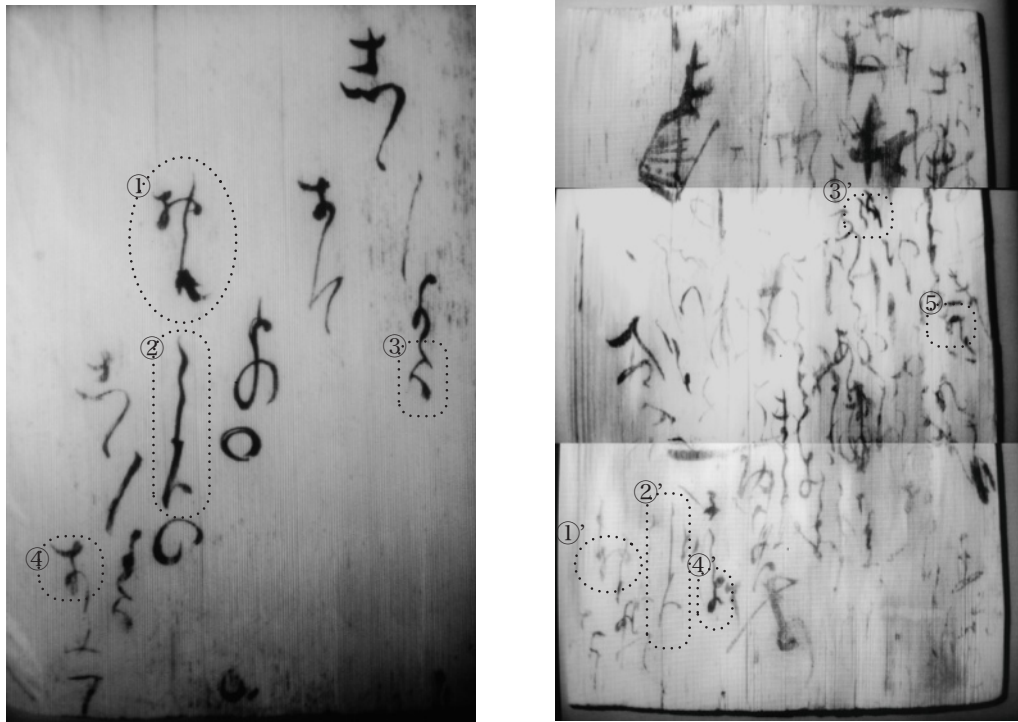


図1 資料2774

折敷の両面に書写されている。左図をA面（\*図は部分抽出）、右図をB面とする。補助線は筆者。

身が参画していた可能性などが推察されている（田中，2004）。本稿では、西行の書として伝西行筆『一条摂政集』の文字を比較参照に使用した。「西行風」とされる古筆群でも特に書的评价が高く、また『曾丹集』の筆者の一人と同筆書者を含むと推察されるものである。

#### 4 平泉出土文字資料の検討と考察

##### 4-1 出土資料2774

年輪年代1158年の折敷両面に仮名文字が書かれたものである（図1）。便宜上、左下に散らし書きのようにして書かれた側をA面、時に行を重ねて多量の文字が書かれた側をB面とした。A面の書写は、造型意識がしっかりしており、言葉の伝達性や美観を保持する意図、つまり他者に読まれる（観られる）ことを想定して書写された可能性が考えられる。一方、B面の書写は忽卒に書かれた印象を受ける。A面とB面の関係であるが、まずAB両面に書された「お」を比較する（表1）。「お」の字母は「於」であるが、AB面の「お」は共に旁にあたる右半分が非常に高い位置に書かれているのが特徴であり、最終画から次字に続く斜面の角度や位置も両字で合致している。この他、図1中の②と②'、③と③'の造型、④と④'における用筆の円転などから察するに、同一筆者とみてよいと考えられる。但し、B面の書者人物が一人であるかは分からない。続けて、表1に二字を抽出した『一条摂政集』（以下、『一条』と略記）の「お」と比べてみると、同一性や直接の影響を指摘するには至らないが、概観として遠からぬ印象を持つことができる。相違が強い点は、先に挙げた旁側に向かう右上がり

伝西行筆 『一条摂政集』 (西行風)	資料2774 上：A面① 下：B面①'

表1 「お」の造型

補助線は筆者



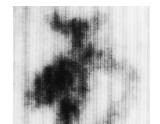
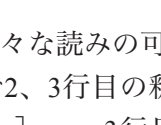
伝西行筆 『一条撰政集』 (西行風)	資料4050
み	
志	
人	
あ	

表2 「みし人」「あ」の造型

の姿態である。右上がりについては、一画目の相違も顕著で、『一条撰政集』にみえる「お」179字のうち、一画目が右上がり書かれているのは、僅かに4文字である。

AB両面で良い造型の文字は、①①「お」、⑤「あ」である。5行目「し(志)」は実直な書きぶりであるが、良いとするには至らないであろう。

#### 4-2 出土資料4050

冒頭は「みし(志)人」と書かれていると筆者は考えている(図2)。筆者も参加した釈読チームでは「みち(遅)乃」とする意見もあり、両方の見解を発表した(岡・阿部ほか, 2011)。筆者の見解は、定石的な文字の関係を前提としており、「人」は一般に大きく書かれること、「乃」は斯様に大きく書かれる文字でないこと、この流れの場合では「乃」ではなく「の」を使うであろうことを根拠としている。他方、チームの見解は、定石



図2 資料4050  
補助線は筆者

に縛られない様々な読みの可能性を担保したものである。

同じ前提上で2、3行目の釈読を試みると、筆者の見解は、2行目「ひ(飛)と[ ]」、3行目「あは(者)れは(者)□」である(図3)。検討チームでは「ひら清泉」「あはれは白」という読みの可能性も担保されたが、「清」「れ」の間にある「し」を、「清」のさんずいと「れ」の旁部分の二重に読み取っている可能性がある。この場合は筆者の読みが妥当かと考えられる。

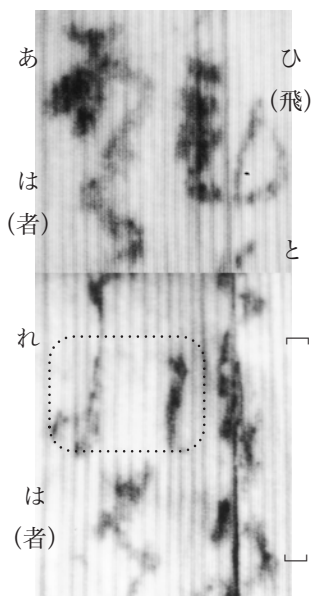


図3 2、3行目の釈読  
資料4050：補助線は筆者

1行目「みし(志)人」、3行目「あ」の造型が『一条』の同字を想起させるものがあるが、資料中で釈読可能な文字数が少な過ぎることからも西行風との直接な関係を指摘するには尚、早計である。しかし線質の面も考慮して、仮名書の変遷という観点で同時代性を指摘することは可能であると考える(表2)。

#### 4-3 出土資料2081

両面書写の折敷である(図4)。連綿における文字間の冗長さや線質などに似通った雰囲気を感じられるものの、表裏が同筆かを判断できる客観的な同一性は看取されなかった。B面の1行目「この」、2行目「は」、3行目「あ」、4行目「お」(全て行頭部)などに見るべきものがあるが、その他では習熟した造型を見つけにくい。



図4 資料2081

折敷に両面書写。左図をA面、右図をB面とする。補助線は筆者。



この資料で注視すべき点は、A面の書式である。行が展開するごとに傾斜が強くなっており、上段最終行では垂線に対して50度を越える強い左傾に至っている。止むを得ず偶然になったものか、あくまで可能性であり意図を推定するまでは至らないものの、当時の仮名消息に時折見られる形式が参考にされたとも考えられる。

#### まとめ

造型面ではこれまで『一条』を尺度として確認してきたように、ごく僅かであるが、部分的に美しい姿の文字が散見される。しかし全体的には成熟されていない不安定な造型が大勢を占めている。また連綿において、上下の文字の連絡（中心、距離、線方向の整理）にずれや冗長さが生じているケースが多い。これらは読みにくさの要因となっている。

線質は、書写面の質に意識や筆触が左右されることも含めて、王朝仮名書美に見られるような線表現への繊細高度な美意識ではなく、禿筆による書き流すような筆致が主体であり、同時代の仮名の傾向と一致する。書字運動からみて、2081などに錬度の高くない線が多く見られるものの、3点の資料は筆の扱いに長けた筆者によるものと考えてよいだろう。

巨視的には同時代の書きぶりの大きな範疇にあるが、僅か数文字に似た造型があることを以て、西行個人や西行風という限定された書風との影響関係までを推察することは、現段階では不可能であった。この時代の書きぶりとは、王朝仮名書美の洗練を土台として個性美が展開した後の、停滞期とでも形容される段階である。平泉の仮名文字文化が12世紀に至るまでに、この洗練美とどの程度接触し通過しているのかという点については心許ない印象もうける。仮名文字が国内の広範に敷衍していく様子を段階的に把握するには、各年代における各地方の仮名資料調査の充実を待たねばならない。

#### 引用文献

栄原永遠男（2011）『万葉歌木簡を追う』 和泉書院

田中登（2004）「のりきよがふで」再考-伝西行筆私家集類の筆跡分類- 関西大学文学論集 54(2), 1-10

岡陽一郎・阿部勝則・小岩弘明・時田里志・七海雅人・平田光彦・菅野文夫（2012）平泉出土文字資料の再検討 その1 平泉文化研究年報 12, 17-24